謡書

友閑并道入
観世小二郎

特別
チ12
3666
4

一　一調　二機　三聲事

調子をは持つは付之吹物の調子を祢とりて
機に合せすまして目をふさきて息を内へ引
てさて聲を出せは聲先調子の中より
出るゝ調子はかり祢とりて機にも合せすして
こゑを出せはこゑさき調子小さう
なくなりて調子をは機にこめてこそ聲
出すゆへに一調二機三聲とは定之かくて調子をは
機に持て出す調子によくあはせて文字をは
口をすくめて心得へし文字ふくむかな
往の事とも頷の内やさしくあり
侍るへし

チ12
3666
4
<2001-283>

毛詩曰　情發於聲　聲成文謂之音

右録世阿弥作

亦曰一調ハ先一声ニ調子を取れる所ニ言ふ
つけくもし調子をきゝわけて後文謡ニ云
其一調子出して二ゑにわたるの為に候一調
とかくれハ二様と云ふ文字をつゝけかたを
肝要と云けれハされハ謡をはしめよりあかし
うたふてハそのとき云ふてよくこゑを
せんをよく其声をきゝてハ息を押付
まはる浅布うつしかしも海色と亦うたふ
くわう稽古はふとくいふと細く声を
織りなす海色を黄くしほれて文字

猿楽之海なるもんを押してふかき稽古
謡完てもと文字をつゝけは初ゟ仰ゟ
第ふかつくして紋を染なすしてる家を
まはりて二様とかくれハ三節と分るゝ
是まで大意の仕なるハ聲比に遠ふして一節
その謡ニ相当せんと謡のおもしろさのみ
祝言の謡るいくて祝言の部とまはり謡て
幽玄るいくて幽玄の聲と出合し大意ハ
まつも同意く其の謡ハおもしろきのるなれ
謡の文字ニあいしてやうにうつし

右是道入記並ニ左判

一聲にやゝとるとしていは変あるは是を節と

ちりかくにきのりんと云かなの同し色也
りんと付たりかなのことく謡をいましめ
同し様なると謡われ共いろく此曲又
如しと面白いふ別紋之打傳なる之

一 三曲と云事は曲を三句に定む事之内と云は
小さくしたるかれて天地人の三さいなるか
上中下共三句にわかるるなりかるの有り小
又為三曲と名付之三曲の口傳は一大事の儀
なれと云ふへしかくし是は口傳にある
書付にてはなし

一 横竪の二字此事是も大事の事にくはる書
付にては口傳と作忘れまじくはさし横竪は
大事是謡に入れもさして用る事文有之
しかし横竪此二字にわかるくる事の
かくは横竪と云てさらん謡はいかに云ふ
まかくあるへくしても能く専に此二字
を法にかけはく法謡有之は右之合此
云てしと記はしといへとも横竪此内能く
云るしやはいかるり小くし思ひうしなへし
いまのまくは皆く絶えはへてもしは
横竪の二字たとへは来てよこに
結ると縦はなてこそと何れもしめとく
細くとわませは謡やり横の聲はよこ
なわ聲を好とく作らくをりして竪聲

ともに聲をうくるにほそくかし息をもちつく
うつくしくはいらしたまは弱きをもかく
息をも抱给ふかくて謡に弱きを体に以ぬる
謡ともに此二字をかんようとなる
べし凡五音といふ文字ハ花園院殿杯世
の頃に謡といふ文字をも秘事のあるとて
謡聲に中々法度はとやとは去られし
謡けれと其まゝそれよりして此節段
五音を作しまるゝと及承候

一 謡ともに文字は五行に合て変する文字に五行相剋
因老青黄赤白黒地水火風空以つまりても
五行に合てり謡もそのことく也

五音とは宮声さしていはゝ五音と也
変を世に合せてもその子細ハ謡と
五行に和合するとてかはるく声と
まるけと云事と申る也光を申
謡に付て切着に能ふせしるとへし
家にて文に申つきつきるの小謡
されて書物にも一調二様三聲とか
つは

一 祝言のうたひやうの事 祝言は祝
ひにかつとし文に別ある事あるく
つとに寄相もしく人の中に祝言
仕を合くするへしと曲かましき変

あらたやうに出来るやうに一しほしも
祝言の詞あるべくは

一 祝言乃詞寄

萬代を松にそへていひなるまのかけすまんとおもへ
天久堅の於代は天地ひらけ国のおこりはじまりの
二行の星ある也名を二柱の神こそ御中主の
国とゝのへとこしへまつ代万やや大君乃
此新まつりに暁とかや
めでたしといへる御代の御誓を祝まへく
しき嶋やかしこき敷島の道のまくる人ぞ
すめらぎや伏見の里は宮古大うち山
の流るゝ雲井とある玉簾の月とぞ

一 やさしきもん

一 幽玄
衣は仏にも遠き名るにかしこきふしにて
ことに世に古かくも人の中に幽
玄とおもしろくふてきていひて夜詞
のやう小なりぬるくし若山に入
見さたることのかはりに詞の
仏おさなしと耳をさに知れあり
さかやか世道に出しし心は晴わたる
必ずくものとしくさくにはに感慨
要は

一 幽玄の詞寄

みやこ人かへこの桜かわ一重の花ちる嵐の音
さむきたそかれの天ひき旅の夜ふし人の様なる木葉
庭の松風更なる月もかゝる所々の
草わら〳〵すまし心ふし人へと思ひ分て
いく川をこえ々変なくてなるへしん
けふなふつとともおもしいおの人にまかする
世をうくおしうくれとも一もとにかはる
仏の法の道をわたれひとに浮は法の道
いまとも眼させ浮み浮ちらひくけふ
もとも見へてさるかのかへとも西の山なみと
詠まれけるかけ旅の空松のこゝろの心こゝに庭
またとも嵐をいはくともさてへいめるさ

世の夢ならわなりの世をはなさらまく
まし

一 述懐

名所の旧跡は大変くまちく思入てはてこそ
其人のはの述にかならずと以おもひ入ぬ
ことそ京なき事に於しこそいかならぬ
連歌なりとも述懐の句をまつくして文
一大事なりのとも存候はそのことく候
うついよさしのうさいはあたのかは
経にあ別して書に浄仏のけしらそてまて
事なしくは

一 もうんかの句等

悲しみもとをかけ我袖ならぬ袂なく
父の形見の雲となりし人の住まゐ
さいはひさへ衆生の身のおとけはあう乃
宗ふらひ清明なる人もしく別とりよ
るとせあく圓かなる月にふも忘れし
枝に離るる秋しるしは桜に露
そやもしらるるかりけふ枝に露
ゆめとなりし嫗のまの夜をかくも
同穴の契りもあるしくらふしもおなし
世の中の事とはなにと川まき草
の露の末もうつろひゆくのかく
そのまことのことの秘濃もよ

侍て今おせまそかくとしらんさるに待し
哥妻の旅ゆふ清まにかるうちに
ゆふべのかけはかるみとあらしと縁
人ここのあくこと思ひ秋の清かみとし
桐下に立清ふてそるのゆかしと詠
まつる八重の旅の縁にてし山居風雅に
もある萩枝とこ秋の書清にかるま川
人ふれ此とも川井戌川のうまし
せむくとの秋冬の扇も小畑のく
風のふるとおもふ人とも夜ともや枝
の窓の旅風もやうに畑のうらにて園宮
の扇もくるのし花をことも次しく

て秋風はあはれなりしやおもふくまなそれも
けふ分きてわかるゝ人しなきものかなしひゐる
まして今更世をと人をなきかはしきし
いつゝ思ひねの程をおもひやれば
てさらぬ別の惜しきやうによむべし

一 哀傷

哀傷一大事之法律に傳ありて謹むべし
らうたはる變之一々秘要之大事なる
によく分かるべし 哀曲を表すべき也 おりし
こと變もとによりて萬の事に出
の聲もなることとしるべし
先き哀傷をおもひいたしていひそふべし

よりく成くさかりと絶は枯野に霜
草もみぢとし謹ましくはますて
心の内に其哀傷を思ひやるべし
と哀傷其謹の事とよくよく心得べし
あらしても毎にあはれなりてたすけ
變哀曲の本体をあらはすべき傳ありく
あるべし

一 哀傷の詞寄

浅茅生や袖に枯野し霜露に草芝
踏くもひいろくすはなるしくてもあるを
かいなきことゝ手のみしていふ
面影の定まるさせのなしいへ人かへる

の花盛せまきの嵐となれハ花葉
の月の秋不定の雲おほふへ実同し
まんのうきへせかれく

一 闌曲

右此曲ハ位高けれる曲なれハ謡を
残とまつへきそなうし但此曲先聞
得るとて謡覚えて亦曲をも仕り
給者ハ前の謡を習ひのことく云ならは
くうしみ此曲ハ前の覚ゆるを引寄
謡く大きく庭の松をりくるにおり
ろうかうしをゆい枝を抱ゆうへきそく
人毎におりるとえハ位よくなき

後まあのくいわ天ハ面白とあまめの之唯身
小筆偽りハ小なるといへる桜乃枝を面白揃葉は
面白くハ唯作物もしかり又きまゝに謡の位り
云ハるを作りる筆偽りる猿丸とくするくゆるくく恋
是肝要之

一 引哥

ほかの引しかまいはわかく山の所を取りに美しまそ
其哥之天地けりけし始ありて謡うる一所あまたりちま
にかりけれいふ景気を移さくし代ヒと謡
と国をおもなく人を取る妙なる也る也為せ伝
へや哥はは世伝へや 比風や伝体
須芸揃名をかつらくなりと云も弁と云も承

ふしなとおもしろきを本ハ俗舞の為にあることなれハかやうの変
をもこゝろへ候人心ひけハ言葉の様ハ世や目の間事を
知るへく

一 闌曲ハ忘暮の隠居にしてこそかくし給ふ
ものゝ綱ありては傳ふにハ余の三の謡よりも
なきゆへ是祝言の謡の中に闌曲よりもなを
謡あり是又其一の秘事也 口傳

一 卅五音并ニ五曲に五音と定て又その事ハ生
まれつき也 是ハ奇よき義なり 衣の曲味も心に
ついとは様なる心持也 会て謡ても川にて謡
曲かましくはうたてきものなれとも曲ハ其所の謡を
よく覚えて其曲をついて置く寄心謡也

小引の秘事五つあるとも秘の落ハ分て残さゝる書
記しをとハ世の書物是く並ちや長ハ五音の
にかうまて御挍は心さし切々に残傳
也

天文廿四年霜月廿一日　　道入 判

一 毛詩曰　情発於声　声成文謂之音
音曲の習やう二つ三つにある処を謡の心をかく
人の曲を心得て文字様をうたてくもなくなるへき
事ハ一文字々々人の声をまて文字を
用る事ハ在一ある事も文字まはるくかな

はにかゝる五音うるはしく句にかなはゝ
文字くさりもよくやはらかにすなほにて殊に
とあるやうに節をは律呂之相應をも
地の曲ともに似合たるやうにつゝしみ男
律やうにいひやう哀感するに出来
面白き義あるへし去ほとに此節此
律やうと自訓て謡の文字をとるへし
文字うたはりうたはしくする濁
の曲似相なる事ははなはた大事也
訓義文字つゝの曲ハ事之元にて栖
おなし身の節曲とおよそ
なるとみえしるものなりとて眼

習扱則〻梅若云聲をよく〳〵出してれ
調子をとゝのへ拍子をよくして能々わか音曲
と習ふには先文字をたゝしくゆるやかに甚接
節しくとさゝこましくる事ニ接曲といへる
事にて接続の位をよく知りて接合様を
拍子拍子ハ初中後ハ調をよくへし一曲に
なまる事節なまりわかくるかたを
文字なまりハ無文字ありてハ一切の文字
を惟ハ声はなまる之節をなまる
とてもよく文字代様ハいひいろん
調のなしきにあて惟ちらぬやうとを
節しかけかくしかしとを

よく/\はかりて口傳とすへし手に習
め文字の事てにのせてよし此それ
おもわかるの性ハ遠けれともかはりけれ六
くはしかしと押しとゝ中ハ大略てに
またその文字のゝ急之声音とは
いろもこゝろにそうへいやるわかあ
うらとこゝろいてはあらきとてに
またの字にくいろとすへし

口傳有　平上去入聲
五音合習る

一　聲とはてに支への（しさ）てる所を先
りしとはからし聲此第ともしつてい
うつのちに呑へしこゝ急のらくなる
相く聲をつくす支此の聲此やうにより
こゝ急はうつかれくとこうまたにの聲をは
かいてよう支たにの横竪にかゝる聲を
相音とよるやうに宵暁此支をいにそ
物数とはいゝく暁此らくなくて
一　時支まうの聲ゐるとは暁にそ
おもはうりれて聲といふいひかくおき聲
とめてはなるしかくてとして急此しは
とも四声ん暇を失りしと雪へし
一　音曲に称云第也此聲此まけとそ

笙者呂律の二つあり出ハ呂といふハなる
こゑ聲あり息の聲也律といふハたゝ
かるしむ息入息といふ也是ハ根本と
仏師なき極めけ説云の息を拵を
たゝはして拵ハて息をはくそれハ手之
笙音部之律の部しやすれ部の拵を
入てつよき息をすて息をかはし拵ハ近
笙呂の聲之根ハ部之然ハ説云之よう
あくの部といふハ部を竹ハして拵と
ゆるくもちいて笙やりしかふうなし
拵をゆるくもちいて入息のゆく笙律
の拵く気なるよしう様く然てはう

とくを気付させりとハ説云の聲出は
拵よるゆるく小調子のてゝくせあるま
てうおく八拵とゆるく拵き子調子のさ
ふくせ仏師なし

一　音曲ハ小曲節ハてき曲とのまけぬを
あき文曲節とやせまき一たりくわかる
なまたて音曲ハ付黒白のかハり見
ありさかりも京文字ハ又曲小節
とよくハ地の曲節とゆふ子曲節と
書うるくとも川く異別ありとおもひ
拍子ハそれと云ふくせ節ハ拍子の拍
も川るかたく諸まゝ息の拍と拵く

拍子とは曲小歌の節にて曲舞にも
拍子の節と拍子にたもちても
小歌の節にてあるべし小曲舞と云事
あるべからず是はかやうにてもあるべき
小歌にてつかひて名付ては小曲舞
曲舞の節をうつして小歌と謡ふは
成るべし是は曲舞と云べきか
くせをもとうつして謡ふは曲舞
面白き面白くてうたふらん当時も
此事は曲舞の節にて一向に謡ふは
となる也是又猿楽の節にて小
曲舞と謡ふべし小歌にて候

第くとてあれども是にて曲舞
の節をうつしてうたひて小曲舞とあるべし
是を大和音曲と申付たるかくる也
曲舞の節はつくりてうたひて候
小歌の節は小歌の小曲の節にて
ちかふと合せて曲舞小歌も小謡
曲まじりて小歌も曲舞にかなわ
ありしかれどもありながら文
覚行要るべからずとは申さぬ
されども付けるを是にて
是をとりてき音節をうつすべし
さて文字を背き

拍曲節とたゝ音楽のかはりとはいふ楽
節また拍子ありと称しうる曲あれ
文字と拍子の拍ふよりて其字ある句
うたはるゝもかろく亦拍子よるく
小ちからく示くるまうの性あるな
まれも一かしの小やすつて面白き
音ありて拍子のありしろき事
称ましるふよりて其なまる所
一節のちからふこゝゆるえ是と楽
節のちからの不露とみえてかうつて
とやハ拍子ふくはさる変もなく
こゝありのまゝ小かうつる所ハ文字

性好も音楽の體の外ましきは
うち詞ちはなくて一句一曲小主なるまゝく
身をとゝのへし人をなほゆめくはうへ
人をやすんもとうさへ一曲纔小
感ずるる例是ほしきかんなきを

一 毛詩云
正得失ハ動天地感鬼神謂之歌かくいへる
けるゝ國のゝみふあらゆるとしふ心詞
かしくかんとゝ地ふつゝかもとしふ歌と
やりしうまし心やまと鬼神もかなしし
物をもいふまふつましそまいの正風とあ
敷いふなふ文字を句梅も性なわ

そのうちに上手のわざといふ事は
世を移る迄は手段へもとつれもとも手
ことには手段の称をわしきうかなを
のつくりまを以て是を聲をみ〳〵と
なりとも以て曲を弥まこる段なれ
は音段のあるの聲は手に之なるす
にやとなせる示されし上手の妙音な
るべし手段のにやたる此称を妙
ふとはよく

享保六年六月五日
此本世ゝ家に相傳秘密之事以不可

一 有他見まじく可秘之
一 唐船下陸の楽之時おりふしによりて
小とりつるのきなるをこの句色し
こゝろへいふきまて之
一 三嶋の曲舞にかけてものにかけく
なくとも小さう立田ものにまくまて之
一 反閇ある上臈のかくしともありはも
不かうしみ舞之
一 立田ある物は流々二三番へは事をもや
頼之
一 二人宗なつこれ世をおもふあるとも
不てあいふもしかるへし流之曲舞の

枝わけてわきこうてやくうこひつ

一 遊行見ともおもしろき舞ハ一し

一 項羽 まへかゝりくるしからす色

後ハ静かに一段とかれて強くし

皇帝ものこゝろもちの位也

一 敦盛 花の位 初ハしつかに面白き

後ハくつろかにつよく拍子を踏へ

なし

一 杜若乃曲舞ハ

一 柏崎の曲舞ハふとやハらかくうつくし

こゝろもち静かなる位也

一 定家の位きはまりあり花ハなし

一 ほかしゝ小歩の心かまへ切ハふとかい

ろくうつくしかるへし

一 玄象乃こゝろ小位にあいかおく花ハ同し

一 道成寺前ハ静かなる乃位之舞ん

もてなしにてゆるみのあひへ一段もやうし

と一段拍子と踏ミ入鼓のかけ拍子に

一 藤ハ小六拍子入候

一 ほとゝきすハ天鼓とおもひておもしろくこゝろにへ拍子おほく

踏へし

一 朝長乃位前ハ静かにうつくしく後ハ修羅

のこゝろもちやくなく曲舞ハもちろん拍子多き也

一 源氏供養乃曲舞よそ上ハ放下僧の

一花のゆくへ切るをかろくうつくしき
時分の位并句のつゝきにかゝは
切嫌同し
一千年とつけいふいふにも雑小遠江候
一楊貴妃をせむとのうしとる舞同前之
一翁太鼓　かけ子舞なと同前小也
きそくてと　いおわすく遠かわ
一流るの曲舞紅葉かさねなとは少しもく
切少難小也之とまれいも同前之
一かゝりきよく人まる難小野小町也之
切少あるへし
一花月　小遠の不いつれもとも同前小
一遠色し切位とも同小伝とて遠へし
一位不動花まて いつれも同前小切ハ横
多相しく
一ねえの位数すれの切れと花は同前之
一あかしそん起請文の同位つゝくかろく
うち咄しし　数よまつゝ連めは小
一遠くし切いつれもつゝく分子もの之
一かるま花はかろくうすらし　いふよ
つまてもやくいろかまると　以眼を
急度し行のうち大小此補祝を法
補てるし色しありかれと思ひね
山の峯小々ありと云本あまり小

謡色しかはらちよりやさしき心
遊川之

一 采女の曲舞さハりにもやさしきしほらしき心の
こゝろへこなたをとなやかにやさしき
一 誓願寺の位羽衣におとらすしとやく
し舞の内も同前之

一 定家頼政 たとへは大事曲舞ハいかにも
さハりにさハらて位にさらまへて遣
一 鉢木 是もいかにも手つよくしらこし
うてあはれにいかにもしほらしく
うつくしき色し 仕舞も是等に
一 あまりさしつかへて曲舞いかにも静に
定家の曲舞ハ少早切子少謡之

一 猩々 是ハいかにも軽く段ハさハりなく謡色し
一 志賀住吉 是ハ軽く謡段ハさハりなく謡なるを
一 鵜飼ハ上段ハ少静にて其後の切ハ少早之
一 白髪の位いかにも早之色の手にさハりなく
一 花筐 位をも在古にやさしく切をすゝき之
一 羽衣曲舞ハ少しハ静にて舞の手ハ誓願寺ほと早き順之
一 さらさらと曲舞大事の謡之切の中ハ早き位之
一 長柄 是ハ少静に脈ハ少早き之二段ハ続ほとるを
一 たきつせてあはれに色しさひしさおもて静に謡へし
一 船橋いかにも是もさハりて切位一段入之
一 東北 是もさハりにさハりて謡切ハ少静に謡なるも
一 七騎落切謡聖少早く是ハ同前之

一 経正者ハ少ニも軽く謡切追善ニハ次第小謡之
大社ハ曲舞雑談に同小謡之切ニ至もし扨又は袖をと
おりしろやと云所を静かに謡其外は上臆之
一 あやめ敷者ハ同小切拍子軽く謡中の位之
一 大原御幸者ハ位井筒程之後ハ少早之
一 吉野静者ハ熊野程之二人静より少早位之
一 杜若の戸位も千手より少早の
一 呉服高砂より少しはやく謡可然
一 實盛ハ物語ハ殊に少しく三百之を言る之所を静
小謡中ニ曲舞扨静に上てより少早謡ハ静かに謡
一 熊坂ハ位ハ鵜程之月を見ても手に為ハ少しくと云
為にも早謡之ほかこゝろえてとなりしてやす云かわる迄謡之
一 清経ハ少ニも静かなる悠揚之云の
こゝろを云て一門と云をとうし
ていと文字にも静かなるこゝろなる
一 兼平の位ハ云にも静かに小唄東
とこしてく謡之後のとても
静小謡之
一 遊行のこゝろハ鵜と同前ニ曲舞にハ
様と同位之
一 いつれも少ニも静かにしてや切ハ
程なる所に思ひやりと云らハ
少しく静かにして云るゝ
一 京清 こゝろえてかとなる

一 松風の一番より仕舞は杜風也と云
所にお松の事をよむと心得て
是も一同にすへし殊にいそく之
松の緑やおもしろのあまさいかにお
いふとかろく謡之
行しらぬやけに申分子承なり
あまりと云所におもしろくうたふへき
物也くし後舞にも二同有と
見ゆるなるへし
一 此や 草木ハ雨露の恵と謡
所にて所はなしく謡ニおさへ
又やはらかにいふもよろしかるへし

こうもいさ謡之半ばにまかせしと云所懸也
あるへき様之曲舞松風よりかるく謡之 此舞も
松風にかわりてやさしき組曲のうちにいふもよ
ろしきやうにくるしく謡之
一 野宮の舞松風にかわりて静なるさ
かるかたにいふとも後の舞は申へし
大やくまかせし
一 百万の曲舞はいかにもおもしろくと
謡ひへし舞はうちハ野宮と同前
一 江口の舞をもさやかにせよと云所にて静に謡
さやかにいふ切はいふともよろしくかけて
と同し其舞のうちにいふもよろし静

一うたひやうへし

井筒は位ハたかくともかろきところハ一向

にかはれと見るよし井筒に於てハさま

になるへし

一夕顔　井筒の位謡にて小

まなるへし

一あさかほ　夕かほのまねにかるく謡

うへなるへし　謡の内も位にかはる

一定家の曲謡野宮の位也切ハ野宮

上川小謡の内に傳あり

一玉の段　一天四海のかうをうらみるものと申

ずわるへきなるへし　残る人當世

のちやとのふかき心も上下小謡

にて候にかはれとふかきにある也

なるし曲謡文字は心のふかき也

なり切も謡もそくはや

一小塩の位たかきよく小鼓にてかくさ謡之

一此ひ　能顔にもかるくはかるく

一西行桜ハ上もさかりなる位也曲謡にくらし

にくらへてもやくこれる事みなみて夢

いえ小々わかに大事にある也

一桜川　桜に曲謡あそひ　桜なるへくかるくこれハ

上川の小謡も同し事也花見構

と同し事の謡に苦しかるましく謡へし

一 當麻二上の事とハ此下ハいふハとも
静ニうつるやうにある所よく後よき
事ニ心もけ候てうるさくしくれハ
といふれハのやうく謡く舞とも
初位游ちり静之

一 わきの位當麻よりもさくさく流海
庭より花入りといふれよりもさくも
かくて静ならといふ所よりも静かなく
謡くしかくも謡ニ初ふれもと云
所より静ニ舞のうちニ又よくよき
くもふへし

一 三ゝる段の四段はかなくやく謡ひてく

論義ハ心ニも静ニ難波よりもよくし
てやく舞ニもおまくし其習
の様ニやと云所ニ心ニも遣

一 大会 天狗のうちかりと静なる事
るくハせ川ある所を以ておもハ心中
出来るハ心をとりく

一 くらま天狗 さて此僧天狗ハ謡
そと謡眼心ニもよく静かなる極
半岩後ニもよく謡と云所より
おもてもあるへし

一 せつハ くらま天狗よりもさや謡曲妹
静ニ可謡

一 山うはの曲舞 静か小謡ニして婦
候ありて静小歌のよし是ハ此山
うはとて云所のありて其小謡にし
多く流にかくこと云所の様にて候
謡之拍子多可然 可路
一 西行桜ハ書眼武蔵よりも時之ハ
よりさる気文も何る事の草録の[illegible]
へありて般海にて祢面白ありてこと
拍子にして曲舞にハ小も静小謡ハ[illegible]
舞の[illegible]の位るの静ハ謡ハ
と云所[illegible]おもさハ拍子にし
こその拍子多く[illegible]とてハ[illegible]

流とこ
一 [illegible]将の曲舞ハ西行桜ハおもて[illegible]
切ハ少く主く大夫面白く拍子
一 それとはつきもちハ海こととゆるへるに
いふ所あらとかろく謡にし論義ハ
ハ小も静小謡にしありて老くと
[illegible]ハるこる謡之かくて小されて雑ハあり
こよ所ハ小とふ所ありハ小もくく道
老とつるハるくし百年小るへるとえ
九合るありくさて紅梅ハくて謂ハ
いふ小と云所ありて出ありとるにあ
謡之法文るくるの亦的礼のるく録

躰かゝはる事かしくとは一句の内に
ところかけり少様子帰をもとめぬ
あし目まいやと云所なり誹ゝに籬道
なし

一 関寺小町の位とはつまらぬものかし
誹ゝに謡之おもし事かくへしと云所なり
誹ゝに可謡節に口傳あり

一 通小町なと申は関寺小町
よしの位ニ及ひ申さぬくらいなれは
つくりと申にも候事にてと云所なり誹ゝに
謡屋し様とも何くも〳〵と云
心あてなく謡切を同前之いつれも一も小町

さやうの位也

一 清書之位別してしるすもにかゝはると云
所なれは申面白く候へく

一 清書の位清書をもなさす誹ゝに切ること
さやくしき

一 是申念ハ古事に祝ふ義なれは誹ゝ
に諸芸にいひくなからしなき所
なしとも心ちうしかるへしと云
なる心のうちに消も何小袖を義（○敵に立時人皆きんなをし被着）
なれ三つ同じ切も誹ゝにもまなし

一 小袖を着せんし着て祝ふと云所にれは今にて
こゝろめてたく誹之面白き所成りやと云

一 ふかき舞のうち素業もなりあとやく
舞ハ切ハ静かにすべし
心之大事
一 仏の道不二の下ニ通して花相也
極ニ仏拘之
一 聲の出所ニあれは有し口のまん
中ニして謡おもしろくは謡なし息
の切不足よりて然る切文字おもくに
てつよくあれは終と知し謡之
一 こゝろうへの大変調子双調ニ謡
聲に大変有ニありてもしの時
平調ニて謡之是ある音の平調ニ同じ

一 眠之変口傳あり
一 謡を人ニきかせ中声ニいたしてあまり聲をおもし
口のまん中ニてうたうへし也
一 曲舞ハ声のさしならすしてハ聲を出し
謡べし
一 よみものハ謡のことくにせとうり小おもしろい
手信と入謡りの之
一 くせ舞の上しのびよし聲とおとこ
といふんのさうしもの揃へあうさい
いへとへし　亦一拍子ハおもしろいあ
謡物之
一 くさきのてにを謡いてもおもし

一　ゆくゝるまそうこふく

一　次第の初しハ胸にて聲をつかふへし
ともに地謡の人ゝハいつれもいつれも
くわうてい申へし

一　指声なとハふとく出しそ候が其後謡と
こつまく（たまわく）中舞のまへての後
おもくい小く謡へし

一　舞の初の胸の下水落にて声をとりいたし

一　和哥ハ息をとゝめのへし

一　云ふし出しおもくいたし申へし

一　詞ハおもてかゝれ声ハおもかけかくへき

出ほうにあらすふかる事

一　祈るに色その下にわ謡出しいたし

一　小謡乃初はこゝろ高きなる聲を出しいたし

一　おもきわかうにわかしくやと云事そのいへ
いさまして胸にわ聲を出しいたし

一　唄乃名をと申小節の名のとふに謡聲
のうちにはく大口なる謡色ハ名をなお

一　さしの後のさしハおもくいたし候謡を地

一　謡に拍ゆいたしいたし謡変あるへし申と

一　亦謡につゞきる変あるへし申と

一　謡く名いしわりの人都になり変も謡の曲お
まてそいく出申し

一　大変もおもくてもしけいこいたしくお

いふまでもなく衣のつき書也観世源次郎
大事性小字小次郎子源六亦小次郎
永田源七郎（小字源四郎）
五百祝義之位書弐百番小わたるべき事
ものなるべし

元亀元

観世小次郎
元頼在判

一 謡並清水源の事福一二段く いふも及ばず
せりし次第小候ふとそてうきわ候
まへし後まで家のうちとるもいひかくべし
云ふ謡並四段まで小女のかゝるべし

一 女のかつらのいひかけて いふも候はす
かふうれしていひかくべし男のかつら
きいふにも候ふ蹉跎るとはあるけれ
この体小成しても それくの仏推拝真
女体小もまつ女なりとも狂女とも候わ
その差別は行ちも肝要なるわまつ女と云
まで野宮の湯まで此定家宗とする女
と云まで宋女もまゝ葛城松風此は大
狂女とまで湯屋まで川の彼まで宗の類なる
色し海極多く何もしまもかゝるべき
あるべし

一 ましろまでやしさあかつるやしとてあまた

是も一段要也大鼓の有にもなきにも小鼓
ともにあはせてうつ事は秘事なり口傳
有之也

一 謡はたゝうたふとうたふと云事
はわけもなきにうたふともなく小鼓とう
つと云事はうたふてうたはぬと云とは
謡にあはせてはわるく相傳をつくべし謡の
の出節にかなはんしんしやのこゝろと云當
座にはかなへるもよきに云事に付ても
くちやうべきのこゝろ肝要也

一 謡のうちに低く云々し謡のとにかく
稽古肝要なり

一 さまはにあはせてのうたひやうあるべくは
一 節より曲節より曲節のうたひやう
口傳あるべき也
一 中いるのうたひやうは小もうすくて高
くうたふべき也
一 吟のうたひ思ひさし此謡の内也と謡外也
吟の謡をはうたふべし思ひさしの八
嗜くつさるべき也
一 老人の謡は小さくやく付る之人此謡は
付るは謡として句をさらぬやうに付るべき
口伝也と謡の内因果之
よくあるはけかることとてあるべき也

何事もかくこと之習服ハ何事もよりかたし
ありてかたき傳なし
一 謡のうち語并ニ肝要之
一 さる事の段切るともよく謡の長くると
一 此雅みとい事大事之秘事之傳也
一 あるいハこゑしけくぬれともやしはく
いふ事なり
一 曲舞の内にはしりき肝要之謡相傳あり
一 元服の謡やう謡切文ハいはくみとら
こゝろえて
一 本の内ゆくへの謡こそいかへきれこ敷とし
不可有之

一 筝とうもとうとうの調子落葉様小あり
ふ覚もの事とも覚とも論かへきん敷とし
うらかへさわなるなり
一 乙女舞の内さしつとも云文ありまた覚
秘事之人のまま傳く覚とえてとたとへ
むかしハ物まねも人のあるまかるを云ひとと
なるくて門のまへ舞肖まあてうなひ
子乃友をちかくるいてたるにはかなく
とうなる謡之絶絶之
一 三字の行の事同しく行かいかきこ
始と少なるしまとはまかなるく
く縦八泉殿乃と云本乃抵なるくし

一　二字も隔ても二句去しはわくへきよし候
無別一字をわかちて候やうに
あらば引すりてわり當りわかち
返すも引て隔ての去とわたり候て
こ引ちりとてもわろく

一　重字の一句の見をもとにてさる事ありやう
嫌也しかしとも未入組がよくの
濃とかろく遣也し亦一字の内の聞
なりとも同様を去るべしと云字の
難見も前に同

一　字とかるの語わけ立也したとへば
あるは野家の下にさえし於其の句ハ

古寺の秋のさびし野の字ち
おほく出るハかなくたるの心のうなるく
新の内ハおのくはへしけは数多く候

一　拘字まじへて数多くての事なれ
ともし世にあらばなし結句人にも留
く家をそへて遣残すてかろく
遣ひをおんならぬにも皆まじへる也
用捨と見は口傳

一　引和るも嫌しまいても嫌しと云実
而心得事口傳あるも

一　嫌しとも同字を去りて遣事無[illegible]とも
又る和の内なしも雲のこきこ

ゆゑに山風をいはんとては松とすへ
よしなり しかるに山風と世に皆よみ侍れは
山風をよむ花を伴ふは宗祇宗長もしたまふ
うつりは花にてとる所は宗祇咲なく
雲にも花を春日山は松とするに花
とるにあらさるにて松を出すに花をなすと
なるへきにあらさるへし 又の秋又この
くすしとる秋にも 数数とよみては宗
とるによるによりかひもなしに此は別也
わろかるへし
一 唄へるとの事なれはかるよしくてもの也
ますは儀によりてはわろくて字あるをわり歯
もしさ川くはえたる口傳にあるまし
一 おしもなきさ宗祇にわりしるかりせて花を
はくる事大に嫌ふ又なり
一 ころ字八色なる字つる字八とる字もとは
あるまじきも大なるは大かしとちいされて
らはさかしもとと云は遍するなとし
又もさるのころなるへし
一 讀も同じ稀なるへし二句もしまへくして
觸くなるはいはれくしと申せはあしく
なるもは不論なりともいへは面白
きく押しるかくともまた何其方
ひもなくわろきすそもなきくと候

のわさとはいへし心得別ち處々の風情之
なさまさゝるゝゑを身のかゝりといふく
うつしゐとやつされたるたねとなく
まつまとうついふはいつれも耳にも
心得とは弁すして而畢竟かなわ
ぬくいつれはまるもはしへつれとある人
とはいへしや

一 五音 呂律 宮商角徴羽の位と
ゑるれして仰しハみさゝ細ふ心を得て
あて示をそれを極ゝ却て自由なる事
肝要なるへし

一 さしゝゑとさしつくハ遠く示さし聲を
いろくある事ましはふみとなくては
さし散しと鼓のうちくよさしさ一せいの
さしゝゑ何事もかいかは一せいのまく
のさし声ハかるくとさやしてゑ之
流みとなくて云さし聲添大事なり
さしゝゑとのわけなくして聲云ある
なくは山うしも小さりやかさす取る
西方の補ハ十万億土とかくると以
やうなる事ととしくとやは

一 あまて遠ハ下曲舞の而とらく何ほ
て遠わけてらわちと安くかふうさひは
何まとおろかよハた小細めてもト上て

それハ口入拙にくはあらてやさしかるへき
うつくしく聞ゆるふしは必調子とさるゝ
ものなれはあらく作人の道へし
一 せめてく座舗にくる調子ハ更ニ答
ふつくはひゝき調子にく道といふと
声をともわらねやすまらひて有
ひゝき調子ハやはらかの口道といふて
けるけふことつもと声をとかけや子道
至し
一 或老人乃御前或被云のこしこ京を
人のかくふくゝ列の道渉不百里を
乃眺乃に拾てを不乃林に句文頌宣辰

字をも添へ不叶事とも為て子尋
仰かけ申度なるを
一 一義能乃ちの様を茶子道て京茶を
後子道尽ると
一 道をあつる文字ハつふとけらる無
とそうくは当字にさゝとあるて字
も道すくむりのにくは
一 三つの不大事乃内には調子乃位より
物のうち拙之京事にくさやすまり有
る人をしあるを傳あるへくは
一 さし声大事乃拙くはそゝゝへくと此
本ことのなりかくくは引まをき此継

曲舞にして急なるをとつまりと
云なりしかり悟て曲舞に付て流
るゝ様もうつくしくとなき物にはは
くとき大事也又かはる文字をと
一 人乃耳に入やうにきこえぬとゆるる
急なるはくとくしく出節間
の妨げれぬ事又気分の次第をも
一 全乃字別してハ何事にもなりの段
或は海山或は合戦場などのやうな謡
は是々今眼前にみるやうに思ひなれ
をなす思ひ様しみて謡をし出す
ふりとて思ひ入をあらし吾身が絶

一 大小揚事には
一 さしわたてゝ乃緩急
文字たまわる文字乃性恵まゝに乃事
ひ川(鋭さ)乃ように足へおもしき事文字乃響
へ舞の序乃へ舞事水なれいは気変
元紫ハ以前きて流とてもしるかるとと
一 五音乃口あひの次第

あ 上音　い 中音　う 中音上　え 下音中　を 下　口すくし舌
か　き　く　け　こ　口もくして書

さしすせそ　歯　云
ちゝの字ハ下音下く
たちつてと
志ゝの字も上音ニ用く
なにぬねの
はひふへほ　くちびる
まみむめも　くちびる
わゐうゑを　のんど
らりるれろ　志たこ
やゐゆえよ　のんど

春	夏	土用	秋	冬
角	徵	宮	商	羽
双調	黄鐘	一越	平調	ハンシキ

一　あかさたなはまわらや
此字ハいろはとも上音く

いきしちにひみゐりい
此字ハ上音也中音之
うくすつぬふむうるゆ
同前之
ゑけせてねへめえれゑ
此字ハ下音乃中音之
をこそとのほもたろよ
此字ハ下音也
但此内乃みの字ハ上音也この字ハ下音之
衣哉ハ四十七字のなかに一大事也秘之
たやすく書するれもいひつたへし　文
字小書之音曲の大事口中五乃習と云也

哉之音をはつけ千度百度稽古すへき

一　五音之内六ヶ次第

第一口内と云事
やいゆによわいうゑた哉ハのんと口
ふくみ此字出音之余乃不ふくみにて云ん
字をつくかへつつくへし

第二せつの文字と云事
あいうゑをかきくけこさしすせそ
此字舌本にふれて離口にて云字

第三くちびるの文
はひふへほまみむめも　此字ハ唇に
傳ある事さりともも哉とはくちびる

まりてさいふく云字也
第四　舌内と云事
たちつてと　なにぬねの　らりるれろ
此字ハ舌にあたりて云ところと云也
舌にあそねハいひかたし一字にて舌にあ
とゝなへし
第五　鼻内と云事
いきしちにひみいりゐうくすつぬ
みじうるゆ　此文字ハよくよく心かけ
字をはなちて云ハ鼻へいつるね此字鼻ゟ出る
事也
第六　せん舌内と云事

たんちんはんてんとんなんぬんねん
ねんのんらんりんるんれんろん此
まうしハ云のさきを舌にかけて字をかくさ
し云のささへふかけ様をまうさん
すへて口の内もるへし
右此一帖ハ尊ハ上るひや一西堂深ニ
にくとゝるせ給ひはましくのおするくハ
一物一字もよらし給て右人のや
傳閑及不のてあしとありたの御本
かゝ会物れし吊の物とうるかゝ意
よすおつまし此の法いゝく手家くの
右手にて書物とゝ反右の井よわ上の氏

はゝまいらしとものありしとおもはれて
これの人ゝこそこそ見えて或ハ継事或ハ
脈乃さいし或ハ殿大殿乃事とも書
ましく有けれとも見えすけかくして
弟子ね人乃君小まき達の弥小なし
御乃つすや西洋諸乃方計とかき知らし
こうしとあるもしかは漸ま不文すと
おもひ前ゝ貴相人令まゝは不相令し
そしるやうや辞んりまことの中ゆて
書集一冊となせるも相文精しく編集
また大略蒸荷抜手みそうるとき見子の
せし又古人乃説緑し事とまの再手

致しをもかくへえしかきつのもわるも立
出来しさるくめくる花めはけ始めらう
なりえし茶花と為冊のこらも常しく
諸流ありて何まかけ活花ハ一言をを
立る九師とも思ふわかくも此乃立る
人あらし一言とも流儀傳ある系捷裏
あるなし秘蔵もなく人ゝ小もも是ら
すてをつらくらき花をとなり
やとくはんやいややう乃抜萃移殖し
てよ自由なしも人まこゝろをそてなくと
され拾りとくなりとまるつくへきえ
世まひろく及るなハ各家乃大事

とて秘物とも所持の人々ハ只度々に
高尚のことをは不及来紛附ハ大
事の初さ深やみに今ことしと覚
給へぬなると云ハらさるにまうまし
皆とまうとうするなるのかわめと
申すえいん徳きものに伝ふ歟のと
伝覚語りしよりと云門のこきうたと只
先哲の道にいとて文字とし不学
やうにありしかうせてハさうまとは
道ともて事一般に心得給ひるし尤
御不覚のまこと小思くも極まの
此うらの神祇仏法儒流等の田史歟

人賤山野の事麗景の事にまて
至りまて継人くし道とはいへね人をも
も広く事とも多事あるよしとへ、
猶あれを敢いたきとかたくし
世間とすらは道にして人世にくく道に
語るんにハ一毫なりともまさかは
蔵のくさうもまた初穀のみそわか
善悪のせんさくともなく天地万物をと
のとくにくハ天地のすかたのまハ
おも世るに於ても人の道と元書もとく
こゝろあちこちは更まりてもその法のう
うろ語りたるこゝろの宗也としたる由写

を極て候ける位にありとこそ申めれ学
ひとり有心と申侍るなれ先々は有心と
く究めて有心躰は人の前にて申候の
調子と申様にかけ機に付て今く詠本之
ここに事行当くさけくうつるも
あくまでうつりをるよくよろしき
極に有しや得しくは有事作るも
ろもしろきものゝ字やうにはなくて
古人ゝ歌は中ゝ又ね詠細みなる
大事に歌は有心をえつゝおりきぬ
かしもる事になりわきの勢あ
小入やうなくとさうく有心と餘

我からにて人にこころすら極に詠る
ものくと申侍は文字數に候を付て志
かし文字つゝきとこゝねやうに詠は皆
もしなきこゝろに畑しと申事とたるへし
詠むとておもしろくいゑくは有畑
よろしく字のまてにも、やうに詠る
字ことに候を申候ら山は其しく
るおもは入ずれんこまきしてかんせい
とやすおもおもしろきとは申之月夜とも
書とも上つね人のよくいなくふかのせん
こゝかくても見よしくは申八十計な
雖ていなきりの山にはるやよもすらけり

にくは心得しかるに謡にて其の謡の仰し
付て殊にくれのくもりあたきかろき
こ川ゐくやめ息はさく字にたわ拍子
の時やう肝要の大事と申ハ能ことに
る川もはさんね義ありくんと気
なる所を取りのましいか様の所をさのこと
拍子にもかけてつかはてつくかるくと
云なして位の笑めとやるくとしてお
す事ある人もおほくハ拍子に言傳し
なすわかやうの所にあるを仰しゆとけ
謡の事共の氣さるへくはり文
字も拍子ハさうまわたりあのまあるさ

謡ハ本よりはくしく三川にかゝく
あまり仰しのなきやうに又くこそ
糸そうえハ位こゝろやうに静かなる
川しえもえの三つをゆるくとりて
こりしもえりとうハはしらにて
三くあつくすはもえゆうにやさしく
はうきやうよろしをうち謡とゆくき
つまくあしき謡とゆすうちこゝろゆ
やうかなしく仰しおほしう紅三川にて
旨くと拍子あるそ位のくもきゝ第にて
なとして上をしつまてはもうまつること
又字ゆへをかあるを字にはきゝ字を

かな手紙し多分は文字たらぬ時し
も川文字とあらはし出て見まし折字
とはまたあらはしさ詠とハ申一しや文字
さしくもの、うちあきやうに立るも
わけやるをとよさと申侍るハ
縁も詠もたるをとするのならしにて
地のへ立てあかるくむしら縁を立てく
詠乃題しる色のへ立てめのやうに
よくつくつくし縁と詠と別に
ふはくあしてとハなにしたるき
うらへとしとも云おもる詠とし一
稽古と詠まへさしと浮るやうに

あらましく詠てハ更に面白くまうくは
折字も声をもふくとゆきさかの
としさそて詠ハかるくとゆゑを知て流
位からくと申せは声たてよくて捨
を此るかやうにたてなるおもしろくて
立てくもしくはゆきとゝうぬやうに
うちみ事かくとくみて我はよかし人
乃御家にくまさて詠をよむの才二
と申は又潤字を思ひて知人を習き
好物のそのよく学ぶを立てる道ゆくて
なれの門たる様ゆゑのみには折字を
まる心乃ままに面白きことをはたまはん

心もさえ猶ところつゝしむ念をやすまへ
あそれしかるへし押字のちからおほく
こゝろかけゆくをきくふかきとゝかく
かんくくは治定落着を要とする事と
残あらりかくりくりては見わけかたく

發句挨三首

まつ発句のならひは先をつよういはゆるは俗語をいはぬ
謡抄に指てよきハ調子と残音の意味を法とはれ
又音とはものゝ奥ゆき脳とゝ定れ不にさて当ゆとは
ある謡ものはしめの三四五つ字を出ると会かしき
おほくる謡を会けいふかしこを説てすらせよ
師の謡手残かろき此物は附てら子有き花

おしゆるは句の物に於て書曲は発句と知て老をかくしく
書曲より字を恐れて曲と笑曲といふなる三ッを定めしよ
発句せ成と物をいふにかけぬといふ曲ふりし
発句せるは意第一と知謡には上手小なるとしておもかれし
書曲は上手よりなくつゝしみ様なよりそといひそ含わ
程の此なるりとりともに此なれてらる人これに見と乾
おしゆるとなり物を小くしれての道の数其子含わ

心持　十五首

書曲の字はいりし経きものゝ為に体ことその数よ
師の形をかろく秘すより書曲の文字を押字をもおほくる
師の序をいへることは様ういそれりとの物と本の足
耳草をとは物の事教の其作なる此の物ハ其の川筋

ふかけハ謡の身持かけをハ鏡を見る所もおよえてわくわ
あまりて聞ハて世にも子中し又喜ひ此句を出し事を
聲を出る程ゆゑ此順ハもとより出すへき替を悦
謡と拍子とを合せいかけん今ハ事成かすに定め
かわも意得んなくいふなりさりとかく謡すとも
思ふる合謡と便りよくハ源出第一所すむる心
さるくかうすゆくるゆゑ因第一聲のたかいれ肝要なり
文字のよみ付にを付けてかうとやあらゆる謡ちとも
色のせいはそれとたつるとはいハ文字に謡に別してし
小謡とても後とせし人とは言にならても命

聲二十首

聲つよき山とさらに松へ渡り神も寄不と出ての中を
継てなお此謡の前後をよくみて謡人所へ参りまたて付
はた声の定まらる所あらして謡ハ在ハの習ひあり
たふくまわかりてへ所の所に谷とりいふたし心めわ
やすの音の其声の声あれていふなはれ斜をさき
声をはなふいて謡ぐれとふかいて節いひまくあり
節のてる色そ高調子岡第一紙を余所にかへるとかわわ
わか月まひくしらと謡との後の我心所ハさず
うらうるを味はわてつよき声かまにて曲とうしかる
しきま声も謡のやうにハはまる上手いかれて我が物にし
立るをよく出して音曲よりも世かてたかれを切見
のとの間も他をおもひ殊に上手なりしかりぬやうに声にて嘆あ
三ケ條も是といふ慢にて三事を去てぬへしるものや

声と云曲をさゝれ流るゝ喜りわかて曲なきいらし
立聲とさけやほたくと任せなれいきニ十かゝて言語之
立聲の文字をすくみのくさてちえやくよゝてるき深切有り
歌扱ととまと拍子と表のこゝ氣持よ行しよけ是ハ
河仙河子絃外川曲の人参や年末の審也よせよ
絃中は接接やとやうこせよ帰く也堂ま厳くすへし

調子十首

ここみとし當季の調子抜云と心得るゝ是れ秘密也
春ハ双調夏黄鐘秋ハひやうてう冬盤しき土用ハ一越
五調子中よ生老病死をいかゝわきまへる事也
五調子のとはよわゝる鼻皆仔細あり口傳あり
一流ハそとくちなりてなの絃負と露参に傳へ侍り
五調子ハ双一ツ二ツ三ツ一口ひやうしなと口傳あり

帰き絃の調子とさゝをよしとて絃をいさ留め心てさすへし
出せ後ハ調子をひきさけやうよ流きなけよいさとくなすへし
立聲ものゝ調子の気るけはいまたの帰ハてい損なり
調子はいらひきゝくそことを云曲よ出いるはいわけなし

傳二十首

曲節をしての道ハかわらぬはまたいと云字と知るへし
皮肉骨ありといふところてのあたいハ調ハかたいなるへし
百韻ハいといふを帰ハ十ならね遠といひとしそか
曲節ハたやらし稚てくるいと声を秘ふといひてし
くやしことくするを綱をと帰ことをつきしと知るへし
あわさかわ稚をそう前よとしるハいよとわかてき曲と云
さし聲ハ出もわると文なき云と一聲足くと文の字と云なり

音曲は拍子わたり以下をかねてまもるともゆるとも定まれ
ありや小字をうつくしといふ事とこれ也
師の節と云又節を聴て云つちりそれ也て曲作れ
能謡は補謡の声を拍子に出し節の出を消はしあり
調謡并謡は謡の曲節をあげてうけわは極也
ある字をとける字を文字をとうちまきそ謡すふ
音曲は声の内の心は其の句の節をとこれまけ
なけまさる節とて拍子にある内の本謡に拍子を以
今川三河をはかりて字は文二字はかくあるも
四季春と拍秋の限の第の謡は其色分れ有り
かくして風音曲を定ておりなるを拍子を
詠をさるトメトトトタトの拍子をとこのへいてさう

雑　三様七首

句々は節の節かりきて謡にし師の節を節に音を付せん
めとをささうとこをくるの謡は各てきて文字を
乱謡にせす謡や字節も付する謡は謡へてわかるを
これ又と謡ひ句の字母と文字拍に去拍子節といふは謡へん
一謡の句ちの一節文字の言葉をあれとりやさとこん
うへ句や下句とふその内に中声の信有とも
内無後の心をね音曲の節やきかか義をこれはいふ
音曲は節とさかく曲とさう拍子をもとれ謡に
謡を立て其心の意と意を謡を雑をかくるとれ
四季小春用文意は小後音曲の五音にかり句の気を
とこ也にかく并て謡を節用と心をとりすけは也

我人の道にて時を得たる小鼓のとみえしもありきと
羽になりいて其身にてとも旨わとりいて謡のかたち
謡曲の節ちある所をちかれかしさうを半者て好くらる世上
ありける謡といふを多のことしてやさき切かつ流の
人あしみえくるる陽意ありき謡曲なるまれなるかたちは人の
今になやくなるをたれるとふといふ論脈よかる法絶
ときは物の気やうやくうちくれるにせわせとを曲に傳えたわ
わずかてくたる文の系のた矣かくこそ子すなかちいさなわ
はけ来りてんしずか心とせり謡よきる道我なれ
脈金のあわとそてと謡わるもいふことにてさくしかて
斉北の武士道意のあまりる道とあるにおりつれ
け書のおもいて詞をきわるかの心ん口傳なきかん

謡曲に三百年あかあひて今曲に至家まさに然かあり来たわ
詞にもくとさふにもほと真の節は曲の名やうにいふなる者わ
節かそく謡をよくしく心の名のつけとをはして法は
意をとてふたりと同なり付謡曲をまたとけ偏し
とあまとを師匠に教る人の余かわれ謡と今わる曲わ
謡曲はゆうにやさしくようにてきものなかなかれ
格世をさうかくれとするもとる安かるを我とはなわ
何しあにも同じとといふてらうて教よりあはる思ふなされ
小謡を覚ゆるきう教わけし事にもかわれなと
こうみかるは日の半年にてふたりつうひとへ一くれ
謡曲のおもきをいはけ夜の四十の答へ有きくれたまる
我の作偏せ道と後世と存わる謡わたかわ

関屋まての事あらし侍るめるハ仰により謹録之訖
天正二暦七月小五日ともしハ源元肥前守高長

[illegible]
[illegible]

以下全て
白紙